

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 李 芙鏞

本論文『源氏物語』における教育—父と子の関係を中心に—は、『源氏物語』における教育について、特に父と子の関係に着目して論じたものである。論文は三編十章から成り、序章と終章を備える。末尾に参考文献と初出一覧を付す。

序章「先行研究の検討および本論文の目的」においては『源氏物語』の研究史を教育に触れた論考を中心に概観し、教育者としての父の役割の解明という本論文の目的を示す。

第1編「息子を教育する父」は三章から成る。第1章「息子を教育する父—漢籍を通じた教育」では、『源氏物語』の冒頭桐壺巻における「読書始（ふみはじめ）」の場面を取り上げ、一条朝の頃の読書始において『御注孝経』が多く用いられている点を『日本紀略』や『江家次第』などの記録によって確認しつつ、光源氏に対する父桐壺帝の教育熱心な姿を指摘する。

第2章「源氏の夕霧教育—「少女」巻を中心に」においては、源氏の夕霧への教育が、父子関係を構築する重要な契機となっていることを述べ、その教育態度は従来指摘される藤原師輔の他、菅原道真の父是善の姿とも類似することを指摘する。ただし、是善との関連については、論証にはより丁寧な検討が必要であると審査委員から指摘があった。

続く第3章「冷泉帝における学問」においては、薄雲巻において冷泉帝が夜居の僧都の密奏によって出生の秘密を知る場面を取り上げ、「いよいよ御学問をせさせたまひつつ、さまざまの書どもを御覧ずるに」という一節の検討などを通して、密奏を受けた冷泉帝が先例を書物に求める姿は『貞観政要』の提示する理想的な帝王像と重なり合うことを主張する。審査委員からは、この場面を直ちに帝王の理想性に結びつけるのはやや性急で、むしろそこからは密奏の内容を誰にも打ち明けられずに悩む冷泉帝の孤独な姿を読み取るべきではないかとの指摘があった。また、類書の『群書治要』の位置づけについても、『史記』や『漢書』などの史書との関連を再考する必要があるとの指摘があった。

第2編「娘を教育する父」は四章から成る。第4章「源氏の明石の姫君への物語教育」においては、蛍巻で源氏と玉鬘が交わす物語論の考察を通して、明石姫君に物語を読ませることについての源氏の意見を「人に点つかるまじ」という表現に着目しながら分析する。考察を通じて、母や乳母のみならず、源氏も明石姫君の教育に積極的に関与していたことを明らかにする。

第5章「須磨・明石の絵日記の考察」では、須磨において源氏が記した絵日記をめぐって、『土佐日記』や『蜻蛉日記』との関連を踏まえた上で、それが明石姫君へ伝えられることの意義を論じる。娘の成長に合わせ、絵日記を与える時期を慎重に考える源氏の姿に、教育に積極的に携わる父の像を読み取る。審査委員からは、絵日記の製作は物語の叙述から元々は紫上に見せる目的であったと思われる、それを明石姫君に伝えようとするに至った経緯を丁寧に追ってほしいとの意見があった。

第6章「源氏の明石の姫君への書道教育」は、源氏が紫上や明石姫君に対して手習の手ほどきをする場面を分析する。特に初音巻における明石姫君への書道教育について、その主体が乳母や母でなく、父の源氏であることを改めて指摘する。また、明石姫君に用意された紙は紫色であり、同じく手習の様子が若紫巻において描かれた養母紫上との関係が示唆されているのではないかと述べる。

第7章「女三宮における朱雀院一父親の過度な愛情」では、女三宮に対して過度な愛情を抱く父朱雀院について検討する。若菜下巻の朱雀院五十賀の場面を取り上げ、この宴に関して物語には儀式次第や調度類についての詳しい描写がないことを指摘する。若菜上巻には源氏の四十賀が、若菜下巻には朱雀院の五十賀が描かれるが、ここでは源氏の養女玉鬘と朱雀院の娘である女三宮とが対照的に描かれていることを指摘し、女三宮が五十賀における自らの役割を十分に果たせない姿が浮かび上がっていると主張する。この指摘については審査委員から高く評価された。

第3編「二人の父を持つ主人公たち」は二章から成る。第8章「玉鬘における二人の父」においては、玉鬘の実父である頭中将与育ての親の光源氏が玉鬘の教育にどのように関与しているかを考察する。第7章を踏まえた上で、若菜上巻に描かれる四十賀において玉鬘が娘としての役割を十分に果たしていることを述べる。さらに、この四十賀が結果として玉鬘の「二人の父」を引き合わせるきっかけとなった点も指摘する。

第9章「薫の実父柏木への思い」では、宿木巻における薫の和歌「宿木と思ひいはずは木のもとの旅寝もいかにくやしからまし」を手がかりに、薫の父柏木に対する思いを探る。「木のもと」の表現について、諸注および和歌の用例を検討した上で、親を失って残された子の心情が表されている可能性を指摘する。

補論として付された第10章『源氏物語』を読んだ比較文学者一六堂崔南善の京城府立図書館講演は、韓国の詩人・歴史学者の崔南善(チェ・ナンソン、1890～1957)の『源氏物語』研究についての調査報告である。『六堂崔南善全集』第9巻所収の講演原稿に着目し、この講演が1931年2月2日に「府立図書館」の「社会館」で行われたという記録を手がかりに、講演会場が京城府立図書館であること、およびその蔵書の多くを引き継いだ南山図書館に講演原稿「日本文学に於ける朝鮮の面影」を収めた『図書館講演録』が所蔵されることを突き止める。この講演が行われた「図書館週間」との関連なども含め、今後の展開が期待されるとして、審査委員から高く評価された。

終章では、各章で論じた問題を総括した上で、『源氏物語』における父と子が、血筋のみではなく教育によっても強く結びついていることを改めて主張する。

以上、本論文は『源氏物語』における父と子の関係を教育の文脈で捉え直し、教育が物語の中で重視されていることを具体的な場面の分析を通して明らかにしたものである。ただその一方で、教育が重視されていること自体の意味や物語上の役割についての説明が不十分であり、血の繋がりがゆるやかになってゆく時代的背景なども視野に入れつつ、さらに踏み込んだ考察が必要であったとの所見が述べられた。しかし、それらはむしろ本論文を基に研究を展開させてゆく上での今後の研究課題と言え、本論文の価値を損なうものではないことが確認された。

したがって、本審査委員会は全員一致して、本論文を博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。